

決して悪くない従来の英語教授法

—— 学校教育における英語指導法に関する提案 ——

岡本 安道

1. 初めに

現代のグローバル社会において英語の重要性がますます高まり続けている。そのような状況の中、英語の実践授業において日本語を使用せず全ての活動で英語のみを用いて英語学習を展開する英語教育法がある。この教授法をオールイングリッシュ方式 (All English method、以下「AE方式」と略す) と呼ぶ。AE方式は、2009年 (平成21年) 3月に公示された高等学校英語学習指導要領 (2009) において英語の授業における授業方法の指針として示され、2013年度 (平成25年度) より各学校現場の英語の授業で先行実施されている。

また、2017年 (平成29年) 3月に『新中学校学習指導要領』、2018年 (平成30年) 3月に『新高等学校学習指導要領』が文部科学省より公示された。その中の、『中学校学習指導要領』「第9節 外国語 第2 各言語の目標及び内容等 英語 3 指導計画の作成と内容の取扱い (1) エ (p.151)」、『高等学校学習指導要領』「第13節 英語 第3款 各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い (6) (p.638)」には、「生徒が英語に触れる機会を充実させるとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。その際、生徒の理解の程度に応じた英語を用いるようにすること」と記されている。

これらの記述を受けて、中学校では2021年より本格的に上記の「授業は英語で行うことを基本とする」授業方法を導入することになった。また、高等学校では2022年よりこれらの授業方法を導入することになっている。

2. AE方式の問題点

AE方式を推奨する理由の一つとして、日本人の英語によるコミュニケーション能力の低さがある。その原因は英文訳読や日本語による英文法の理解が中心であった英語教育のスタイルにあると考えられたようである。その証左

に、2017年（平成29年）7月告示の『中学校学習指導要領解説』「第1章 総説 外国語科改訂の趣旨と要点（1）改訂の趣旨」の中には、「授業では依然として、文法・語彙等の知識がどれだけ身に付いたかという点に重点が置かれ、外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組、特に『話すこと』及び『聞くこと』などの言語活動が適切に行われていないことや『やり取り』・『即興性』を意識した言語活動が十分ではないこと、読んだことについて意見を述べ合うなど、複数の領域を統合した言語活動が十分に行われていないことなどの課題がある（p.6）」と記されている。

つまり従来の日本の英語教育は、文法を中心にした英作文の学習（writing）、英文訳読（reading）、英単語の記憶などに偏り、一方で「英語で話す（speaking）」、「ネイティブ英語を聞く（listening）」といったコミュニケーション英語を重視した認知学習が十分でなかったために、その反動として「英語の授業は英語で行う」と言った英語教育が叫ばれたのではないと思われる。

しかし、江戸川・久保田（2014）の『学習指導要領の「授業は英語で」は何が問題か』では、「授業を英語で行えば学習効果が高いという理論的・実証的根拠はない。」（江戸川・久保田、2014、p.70）と記されている。彼らは、「現実には、英語が『好き』な中学生は25.5%で、9教科中で最下位水準である（ベネッセ2009年調査）。英語の授業が『70%以上わかっている』高校生も4割以下だ（同2006年調査）。英語が苦手な生徒に英語で授業を行えば、『わからない』・『嫌い』が加速しかねない。」（江戸川・久保田、2014、p.71）のように、AE方式の授業に対して懸念を抱いている。さらに、AE方式の問題点として鳥飼（2017）の『「英語の授業は基本的に英語で行う」方針について』では、以下の内容を指摘している。

- ・教師自身が「英語で授業をする」という目的を果たすために努力を傾注する余り、肝心の生徒をみていないことがある。
- ・生徒が授業を十分に理解せず自信を失う場合がある。
- ・英語での授業を受けている生徒の様子を観察していると、分からないまま座っている生徒がかなりいる。」（鳥飼、2017、p.80）

以上のように彼女は学習者への配慮の欠落に懸念を抱いている。

また、高校での英語の実践授業は多分に大学入試への準備という意味合いを持っており、これまでのセンター試験や2021年より実施された大学入学共通テスト、また大学入学試験の英語の試験内容には、スピーキングの能力を測定するようなテストの実施はそれほど多くは見られない。いくつかの高等学校や大学の推薦入試における英語面接、ライティング・テストの導入やリスニングの

能力を測定する問題の増加など、多少の変化が見られるが、まだ不十分である。従来の形式とあまり変わらない文法を中心とした出題傾向が今尚根強く続いているように思われる。

生徒から教師が英語の授業中ずっと英語を使用するので英語学習が嫌いになったという意見が多くあるのも事実である。

確かに定期考査の英文法を十分に理解出来ていない生徒が多く見られるとすれば AE 方式の授業が優先されているためではないかと思われる。また、定期考査の得点の低下は生徒の英語学習へのモチベーションの低下要因の一つにもなる可能性が出てくるのではないかと思われる。

3. CS 方式

どのような言語にもその言語の「文法」が存在し、その文法に則ってきちんと理解することによってはじめてその言語を正しく理解できる。その土台の上に聞いたり話したりする活動を重視する英語授業を受けて音声の弁別能力を高めることで、「書く」「読む」「聞く」「話す」という4技能をバランスよく習得でき、文法的な能力だけでなく、コミュニケーションな言語能力、ひいては総合的な英語力が獲得できるのではないかと考えられる。その効果を見込んで、多くの教育現場では、特に英文法を説明する際に日本語を使用している事例が見られる。会話の際に2つ以上の言語の切り替えを行うことをコードスイッチングと呼ぶことから、この教育方法のことをコードスイッチング方式 (Code-switching method、以下「CS 方式」と略す) と呼ぶことにする。

4. CS 方式の効果

個人的見解としては、授業中に教師が例えば「形容詞」や「副詞」等といった文法用語を英語で adjective や adverb と言っても、生徒にとっては何のことも理解できていなかったのではないかと推察される。仮に辞書を引いて「adjective は形容詞、adverb は副詞」と理解させたとしても、国語における「形容詞」「副詞」の分類と英語の adjective、adverb の分類が異なるため、更に混乱をきたしてしまうように思われる。英語学習初級者である中学生にその相違を英語で説明して理解させるのは非常に困難であり、日本語を用いた方がはるかに理解させやすいと考えられる。そういった英語や国語、それぞれの授業で扱う品詞の分類の違いを学習者に伝えるために英語で何度も説明するよりも、

日本語で説明する方が、より円滑に授業を進めることができ、定期テストの得点にも結びつくのではないかと考える。生徒にとっては英語の文法用語の意味や内容を理解すること自体に困難さを覚え、それが高いハードルになっているように推察される。生徒のそのような状況を教師が把握して、きちんと生徒が文法用語の意味や内容を理解しているのかを一つ一つ確認することも英語活動を通じて行う必要があり、それが実際にできていたかどうかにも疑問の余地がある。

AE方式では「英語で授業を行うことを基本とする」という共通ルールがある中で、生徒たちが英語で質問しなければいけないということから、質問をしたくても出来ないという状況を作ってはいなかっただろうか。そのことについて生徒に丁寧に対応することが出来ていたか否かによっても大きな差が生じていることも考えられる。

英語に触れる量を増やすことも確かに大切ではあるが、その基礎である「文法」もしっかりと学ぶことが英語の総合的な学力を身につける上で非常に重要であると言えよう。

AE方式では生徒が質問をする際にも英語で質問しなければならない場合もある。そのような環境の中で、どのように英語で質問すればよいのかと考える生徒もいれば、教師が英語で何を話しているのか理解できないので質問すら出来ないという生徒もいる。そのような状況の中で内容を理解できないまま質問も出来ずに時間だけが経過していくのである。さらに生徒にとっては英語の授業そのものが毎回苦痛になり、恐怖の時間を過ごすことにもなりかねないように思われる。教師自身も生徒が文法や発問の内容を理解出来ているかどうかの確認をきちんとしていたか否か、また生徒が英語で質問しやすい環境を整えていたかどうか、例えば質問する際に使用すべき表現や例文を教えていたかどうかにも疑問の余地があるようにも思える。

英語の文法をしっかりと習得せずに英語の総合的な学力が身につくとは考えにくい。AE方式は英語の発音や語順の感覚を身につけたり、慣用表現を記憶したりするには非常に良い方法であるが、それだけでは決まった表現の丸暗記に過ぎず、応用力が身につかないように思われる。CS方式で英語の文法や重要な英語表現などは日本語できちんと説明した上でAE方式を導入すべきであると考えられる。

5. AE方式の効果と注意点

英語で話せるようになるためには、英語の音声に触れる機会を増やすことが必要不可欠であると考えられる。その機会を提供できるのは、AE方式のメリットであるように思われる。さらにAE方式は従来の文法中心の英語教育から脱却できる可能性もあり、英語を英語でそのまま理解し、コミュニケーションな英語を効果的に学ぶことが出来るかもしれない。また、AE方式での授業は従来の授業よりも一層実践的で充実した英語力の獲得が期待出来るように思われる。それまで日本語を使っていた部分も英語を使用することで授業中に接する英語の絶対量が増え、多読多聴によって英語の弁別能力や英文理解もしやすくなるだろう。さらに質問や発表も含めて、英語で発言する機会も増える。英語による質疑応答のやり取りは、反射的に言葉を考え、発信する英会話能力の向上につながり、日常会話でよく使われるような英語表現も多く習得できるのではないかと推察される。授業から日本語を排除することで、日本語を経由しない思考訓練が期待できるのではないだろうか。従来の英語の授業を「英語の読み書きの訓練」とするならば、AE方式の授業は「英語によるコミュニケーションの訓練」と言っても過言ではないように思われる。AE方式には以上のようなメリットが考えられる。

しかし、AE方式の授業では、必ずしも十分な英語力を身につけることが出来ているとは言いがたいように思われる。英語をただ理解するだけでなく、自分の意見を正しい英語で発信し、また相互に英語を使っての意思疎通が図れるようになるためには、あらゆる言語学習の基礎である文法の基礎知識の獲得が必須であるように、しっかりとした基礎英文法の学習が不可欠であると思われる。さらに、生徒がきちんと英文法を理解し、定着しているかどうかを教師が丁寧に確認しながら授業を進めていくべきであり、生徒の英文法の理解度を確認するためにも、形成的評価として小テストを随時実施し、ステップ・バイ・ステップで進めていくことも重要なことである。さらに授業後に生徒からの感想や意見を聞いたり、書いたりする場を提供する事も大切であると思われる。

AE方式では教師は基本的に英語を使って授業を展開するため、教師の英語力が非常に重要になると考えられる。教師の英語力が低い場合はその逆となり、生徒が教師の英語を聞いても理解出来なかったり、教師の誤った発音や表現を生徒が覚えてしまったり、最悪のケースでは英語がなかなか理解できずに授業そのものがつまらなく感じてしまったりすることも十分にあり得る。

6. 総括

文部科学省が2017年には中学校、2018年には高等学校において改定し、公示した新学習指導要領と従来の学習指導要領を比較してみると、新学習指導要領では、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る」という点が重視されている。これまでの日本の英語教育は単語や文法などを重視した「知識伝達型」であったために英語によるコミュニケーション能力の育成が不足していると考えられたのであろう。現実社会で会話や文書で英語を使うためには、文法など言語の構造知識が欠かせないことは事実である。一方で、教師が生徒に対して一方的な解説を行うだけでは実践的・総合的な英語力を身につけることは困難であると考えられた。そのため、英語教育の研究者たちの間でこれまでの「覚える」英語から、「使って覚える」英語へと方向転換することで、英語教育の活性化を図ろうと考えたのではないかと思われる。とりわけ研究者たちは、初等・中等教育レベルの仕上げ段階に位置する高等学校で、コミュニケーション能力をしっかりと養うことによって国際的に活躍できる人材の育成につなげることが可能であると考えたのであろう。

しかし、教師の指導法によって生徒の動機づけも変化することは否めない。

教師と生徒との関係性や、教師の指導力が大きな要因の一つであるとも考えられる。

生徒の動機づけを考慮せずに、生徒の英語によるコミュニケーションの向上をはかるには50分の英語の授業を文法も含めて全て英語で行うことが最善であると考えているのではないかと思われる。

多くの英語教員の中には学習指導要領にある「授業は英語で行うことを基本とする」という文言を「全て英語で授業しなければならない」と捉えているように思われる。

しかし、白井（2012）には「実際に英語を使えるようになるには、英語を聞いたり、話したり、読んだり、書いたりして、意思伝達的手段として使う必要がある。その時間が圧倒的に少ないという現状を変えるために、『英語の授業は英語で』という方針が出てきただけである。文法の説明も、日本語で行った方が効果的な場合がいくらでもある。基本的な考え方としては、All Englishなどと肩肘張らずに、基本は英語で、英語を使わない時間を最小限にするよう努力することが大事である。」（白井 2012 p.110）と記述されている。

言語によるコミュニケーションとは、「聞く」「話す」活動だけではない。特にインターネットを通じたコミュニケーションが普及している今日、「読む」「書

く」活動もコミュニケーションとして不可欠な要素である。自分の気持ちや意見を相手により正しく伝えるには、これら4つの技能をそれぞれの目的や場面、状況に合わせて適切に選択したり組み合わせて情報や考えなどを的確に理解したり、適切に伝え合う必要がある。どの活動においても、英文法を正しく理解し身につけていなければ、相手が伝えようとしていることを誤解したり、あるいは自分が伝えようとしていることが間違っって伝わったりする可能性が高くなる。文法は単に暗記するべきルールなのではなく、円滑なコミュニケーションに必要不可欠なものなのである。

定期考査での英文法の定着が出来ていない学習者が多く存在することを考える時、上記のようなコミュニケーション力を含めた総合的な英語力の向上のためにもやはり英文法の必要性を考えなければいけないと思われる。

7. 今後の英語教育法への提案

それでは今後、日本人はどのようにして英語の習得を目指すべきであろうか。日本語は、例えば英語や中国語と比較して語順が異なる。即ち、日本語の認知スタイルはS + O + V型であり、英語や中国語はS + V + O型の認知スタイルである。それ以外にも時制や冠詞をはじめとして様々な文法的相違がある。そのような認知スタイルが根本的に異なることが、日本人による英語や中国語の理解、さらにはコミュニケーションを困難にしている一つの原因だと推測される。従って、言語の背景にある文法をしっかりと習得した上で、英語を聞いたり話したりしその認知スタイルに沿って訓練することによって外国語の習得が比較的容易になるのではないかと考えられる。

以上の内容からも英語教師は再度英語の実践授業について深く検討すべき時であると思われる。学習指導要領の中でも全てを英語で行うとは記述されていない。しかし、英語教員の研修会等では、「All Englishでの実践校」の映像を見てその教師の技量を我がものにしようとする傾向がある。映像を見たり実践校の英語教員の話の聞いたりするとやはり「50分間全て英語で行わなければいけない」と考えてしまっても無理はないように思える。しかし、英語教員はこれまでの授業をそのまま英語化しようとするのではなく、生徒にとって最も理解しやすく、容易に定着できる英文法の説明や重要な英語表現の習得を目指した授業計画をもっと考えるべきだと思う。また、学習者の中には文法だけは日本語で説明される方が理解しやすいと考えている者もいるかもしれない。そのような生徒の意見や思いも英語教員は尊重すべきではない

だろうか。

授業計画の中で、英語の学習法の一つとして「シャドーイング（影のようについていく）」がある。聞こえてくる英語音声に少し遅れて、聞こえた音声をそのまま真似するように発音する学習方法である。まさにこれが心理学でいう模倣学習である。以下に「シャドーイングの学習効果」についての記述がある。

「英語の音声をそのまま素直に自分のものにできるようになるため、単語の発音やアクセントが身につくやすくなる。英語の音声の特徴を知識として学ぶことで、日本語風の発音から脱却でき、英語らしい発音ができるようになる。また、英語を話す、聞く、読むときにおいて、日本語を意識しなくても、チャック（英語のかたまり）ごとで意味を把握できるようになる。いったん日本語で考えることなく、英語を使いこなせる脳を育てる。」（三宅・太田、2012、p.10）

この訓練方法は音声の弁別能力を高め、しかも文章の意味を前から理解していくという点において英語力の向上に最適な方法であると考えられる。

「英語の授業は英語で」というコミュニケーション能力を高めることを重視した授業スタイルに効果があるということにも一理ある。しかし、50分の授業の中でシャドーイングのような学習方法をこれまで以上に意識して多く取り入れることも他者と英語でコミュニケーションをとる際の英語学習の一つの手段であると思われる。

また、英語の授業の導入、生徒への指示や評価等は生徒が理解しやすいような簡単な英語を何度も繰り返し使用することでその表現がどういった意味を表しているのか、どのような場面で使用するのかを徐々に生徒が理解し自らも使用できるようにするためにも有効な手段であると考えられる。大切なのは生徒一人一人が授業内容をしっかりと定着しているかどうかを教師がきちんと確認をしながら授業を進めていくべきである。

英語教員にとっては今後より一層の英語教育法の研鑽が必要であると思われる。

ー引用文献ー

- 江利川春雄・久保田竜子 (2014) 『学習指導要領の「授業は英語で」は何が問題か』
大修館書店.
- 三宅滋・太田恵子 (2012) 『日本一やさしい初めてのシャドーイング』 成美堂出版.
- 白井恭弘 (2013) 『英語教師のための第二言語習得論』 大修館書店.
- 鳥飼玖美子 (2017) 『「英語の授業は基本的に英語で行う」方針について』 学術の動
向.
- 高等学校学習指導要領 外国語編 『第8節 外国語 第3款 英語に関する各科目に
共通する内容等 4』 2009年3月 文部科学省.
- 高等学校学習指導要領英訳版 (仮訳) 『Section 13 English, Article 3 CURRICULUM
DESIGN AND TREATMENT OF THE CONTENTS FOR EACH SUBJECT (3)』
2012年10月 文部科学省.
- 新中学校学習指導要領 外国語編 『第9節 外国語 第2 各言語の目標及び内容等
英語 3 指導計画の作成と内容の取扱い (1) エ』 2017年3月 文部科学省.
- 新中学校学習指導要領解説 外国語編 『第1章 総説 外国語科改訂の趣旨と要点
(1) 改訂の趣旨』 2017年7月 文部科学省.
- 新高等学校学習指導要領 外国語編 英語編 『第13節 英語 第3款 各科目にわた
る指導計画の作成と内容の取扱い (6)』 2018年3月 文部科学省.
- 新高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編 『第3章 英語に関する各科目にわ
たる指導計画の作成と内容の取扱い 第1節 指導計画作成上の配慮事項 (6)』
2018年7月 文部科学省.